

## 諏訪瀬島での離島巡回歯科診療同行実習を終えて

上村 恭子

今回、私が同行させていただいた離島は、鹿児島市からフェリーとしまで10時間の位置にある、十島村の諏訪瀬島です。諏訪瀬島は、活火山「御岳」を中心に、人口約60人の島民の方が美しい自然に囲まれながら暮らしています。



今回の離島実習は2泊3日の予定で1日目は船中泊で、2日目の午前より実際の診療が開始されました。

診療は、公民館と歯科巡回診療車「こじか号」で行われ、こじか号の内部は普段、病院で使用しているものと大差ないユニットに加え、X線撮影及び現像装置が備え付けられており、診療内容は小児のう蝕処置等が中心となりました。



こじか号



一方、公民館では成人の義歯調整、口腔内診査を中心に行うべく、ポータブルのチェア、エンジン、ライト等を、衛生士さんを中心に皆で準備し、診療できる環境に整えましたが、病院やこじか号に比較すると、スピットンもありませんし、ライトも十分な明るさでなく、万全な診療環境とはいえません。しかし、その場にある物で、患者さんの主訴を可能な限り解決しようとする先生のお姿を見て、これが離島診療の醍醐味なのだと実感しました。

全体として、成人の方は多くが検診目的でしたが、大きな歯科疾患も発見されず、口腔環境は悪くはありませんでした。一方、子供たちの中には歯髄に及ぶう蝕が発見され、後日、大学病院に来院してもらい、本格的な治療をすすめることになった子もいました。

17時に診療を終了した後、19時より公民館にて、歯に関する講和が行われました。発達系の先生から小児のう蝕について、成人系の先生から歯周病についてのお話いただきましたが、30名弱の島民の方々が皆さん一生懸命に聞いている姿を見て、この鹿児島大学歯学部で将来歯科医師になるべく、勉強できていることは幸せなことだと再認識しました。講和の後、私たち学生も衛生士さんと一緒に、子供たちに、染めだし→フロスの使い方を中心としたブラッシング指導を行わせていただきました。先にも述べましたように、諏訪瀬島では子供たちに大きなう蝕などが目立ち、小児の口腔環境を向上させていく必要があると思われます。公民館に来てくれた子供たちは、主に小学生で、フロスの使い方を教えると皆、自主的に清掃に取り組むことができていました。「フロスは持って帰っていいよ」と伝え、「ありがとうございます。」と喜んでくれ、清掃指導とはいえ、私たちもとても楽しい時間を過ごすことができました。



講話を聞きにたくさんの方が来てくれました。



齶蝕染め出し中

夕飯には、民宿の方がバーベキューを用意してくださり、その日の朝に釣れたマグロのお刺身やトビウオ、パッションフルーツなど地元の食材を振る舞ってくださいました。新鮮な食材をお腹一杯になるまで頂き、至福の時間でした。先生方とも通常の臨床実習では時間がなくて出来ないお話をさせていただくことができ、とても有難い時間を過ごしました。

3日目は、フェリーの時間の都合で、診療に参加する時間がほとんどないということで、島内を少し観光させていただき、島の中で過ごすことができたのは、ほぼ丸一日でしたが、美しい島の自然と島民の方のあたたかさに触れて、必ずまた来ようと強く思い、再びフェ

リーで 10 時間をかけ、鹿児島市内に戻ってまいりました。

普段の臨床実習では体感できない、限られた環境の中での診療見学および地域の方々との交流の機会を与えていただき、心から感謝いたします。この離島診療は鹿児島大学歯学部多くの誇れる特色のうちの一つであり、もしも、興味とチャンスがある方は、ぜひ参加することをおすすめします。



診療チームのみんなとの食事

## 離島巡回歯科診療同行実習を終えて(諏訪瀬島)

大西 梨恵子

私たちの離島実習は10月14日から16日にかけての十島村の諏訪之瀬島になりました。

鹿児島県外で生まれ育った私にとって、離島というものに馴染みが薄く、鹿児島大学に入学していなければここまで意識することはなかったと思います。しかしながら、入学してしばらくして、本学では離島実習があることを知り、当初から関心があったことは事実です。1年生の頃に与論島に行く機会があり、そこで島の人の温かさ、大自然の美しさ、時間が止まったような感覚等を体感し、とても感動しました。当時は現地の歯科医院に行き、少しの時間でしたが見学させて頂くことができました。離島ならではの治療の難しさ、島の人の健康についての意識等、そこから学ぶこともありましたが、1年生で歯科についてはまだ無知だった私にとって、イメージが湧きにくいところがあったと思います。このように、その頃から僻地の医療に少なからず興味があったので、離島実習は是非行ってみたいと思っていました。そのため実習に参加させて頂くことが決まった時はとても嬉しく、久しぶりに行く離島にワクワクしました。

今回の離島巡回診療は補綴科の西先生、小児歯科の武元先生、さらに歯科衛生士さん達、同行教員の南先生とともに、14日の深夜にフェリーとしまに乗り込みました。フェリー自体は予想以上に大きく、乗客も多くて少しびっくりしました。その日はすぐに就寝し、朝目が覚めると辺り一面はまさしく「大海原」でした。その中ではこのフェリーも小さな乗り物に感じられ、日常生活でここまで大自然を体感することもないなと思いました。



およそ10時間の乗船を終え、諏訪之瀬島に到着しました。現地には看護師さんが一人いらっしゃり、島の人と私たちを結ぶ役割を担っておられました。また、到着して初めて歯科巡回診療車と対面しました。この中に歯科治療の小道具がびっしりと詰まっていることを知るのに、そう時間は掛かりませんでした。上陸してすぐに、まず荷物を置くために民宿へ向かいました。民宿のおばさんは私たちの面倒を全て見て貰えるような、しっかりとした、頼りがいのある方でした。挨拶もゆっくり出来ないまま、直ぐに公民館に移りました。巡回診療車のチェア

1台で診療するものと思っていましたが、公民館に更に1台、簡易チェアを組み立て、診療車と公民館の2か所で行うとのことでした。そのため小型バス程度の診療車の中から出てきた小道具の多さに大変驚きました。チェア、タービンやコントラのセット、バキュームのエネルギー源となる掃除機など・・・衛生士さんが中心となって、みんなで協力して運び出しました。何もなかった公民館に、衛生士さんの機敏な行動と指示のお陰で、わずか30分程度で診療室が完成しました。



滞在時間が2日という限られた時間の中で、多くの患者さんを診なければいけないという状況は、僻地医療の1つの特徴でしょう。衛生士さんは離島診療に何度も行かれているようで、診療室の組み立てはもちろん、何がどこにあるかを全て把握されており、その行動の早さに非常に頼もしく感じられました。聞いてみると、私たちと年齢がほとんど変わらず、とてもびっくりしました。同年代の働く人を間近で見て、自らの立場と行動を省みる必要がありました。

患者さんについては、その大半は検診目的の方が多く、主に子供と学校の先生等が来られています。島民が40人前後であるのに対し、中学生までの子供が15人程来ていて、その多さにびっくりしました。

そのうち検診で、加療が必要と診断されたのが6人おり、割合からすると多かったです。また検診以外の、治療を希望して来られる大人の方が少なかったのも印象的でした。インレーやクラウンなど、1回では出来ない治療をどうするのか、興味がありましたが、そのような症例は残念ながら見学する機会がありませんでした。

基本的に診療車と公民館での診療内容に大きな違いはありませんでしたが、診療車にはレントゲン装置やオートクレーブが完備されており、材料が揃っていれば歯科治療は可能である印象を受けました。ただ、材料が限られているので、節約の意識が高く、アルコールワッテでさえも無駄に使わないように心掛けていたように感じます。それまで大学病院では余分に取っていたことを振り返り、医療現場でも地球全体の資源を日頃から意識すべきだと思いました。



1日目の診療は予定よりも早く終わり、17時には全て終わって民宿に帰ることになりました。民宿ではおじさん、おばさんがバーベキューの用意をしてくれ、新鮮な魚介類やお肉を堪能しました。その中でも、南先生がお気に入りのおばちゃん特製焼きおにぎりを私たちにも作って頂き、溶岩プレートで焼くアツアツの焼きおにぎりはとても美味しく、忘れられない味になりました。

19時半に再度公民館へ戻り、島民のみなさんに向けた講演を西先生がされました。子供から大人まで20人以上の参加があり、先生の歯周病についてのお話をみなさん真剣に聞かれています。その後、私たちも、衛生士さんと交えてレッドコートを用いた歯磨き指導を行いました。子供をはじめ、フロスの存在を知らない人もおられました。練習すると少しずつ磨けるようになって、付着していたレッドコートが取れると嬉しそうにしていました。離島の歯科医療では、手軽に治療を受ける環境がないため、日ごろの歯磨きがとても重要であり、このような機会がより多くあれば、

島民の方の意識も上がり、う蝕や歯周病を予防出来るのではと思いました。

楽しい時間はあっという間で、次の日の診療は、フェリー出発時間の都合で行くことが出来ませんでした。西先生と武元先生、衛生士さんは引き続き十島村を巡回して診療されるため、私達と南先生朝でお別れになりました。昨夜のバーベキューで、民宿のおじさん、おばさんとも打ち解けたばかりだったので、民宿を出るのがとても名残惜しく、寂しい気持ちになりました。フェリー来航の知らせが島内にアナウンスされたので、私たちは南先生、民宿のおばさんとともに港に向かうと、そこでは既に島民の方が沢山おられ、わざわざ見送りに来た人もいました。



フェリーに乗り込むと、島の方々が大きな手を振ってくれました。それは見えなくなるまで、絶えず振り続けてくれたので、私たちもそれに負けないうくらい大きく振りました。本当に短い時間であったのにも関わらず、温かく迎えて頂き、見送りにも来て頂いたことに感謝しています。出来ることならもっと一緒の時間を共有して、より信頼関係が深まればよかったなと思いますが、またいつか、個人的に島の方々に会いに行ければと思います。

そして何より、このような貴重な機会を下さった大学の先生方に感謝しております。大学の実習では学べない、離島診療の実際だけでなく、島ならではの雰囲気や人々の健康に対する意識など、現地に行かないと見えないことを沢山教えて頂きました。今後の勉学に加え、将来的に医療従事者となった時に、この経験を少しでも活かしていきたいと思います。

ありがとうございました。

## 口永良部島への離島巡回診療を終えて

宮本 昇

2011年5月9日～11日の期間、口永良部島での離島巡回診療に同行させて頂きました。私は、以前から僻地医療に興味がありました。離島には、歯科医師が不在の地域があり、鹿児島大学歯学部では、県歯科医師会により定期的に行われている離島巡回診に参加していると知り、今回の参加を希望しました。

口永良部島へは、私たちの行ったコースでは、鹿児島南埠頭から屋久島までフェリー屋久島Ⅱで4時間、屋久島で乗り換えた後フェリー太陽で1時間半の、片道計5時間半の船旅で行くことができます。台風1号が近づいてきていたこともあり、滞在期間は予定よりも1日短くなってしまうという離島ならではのハプニングもありましたが、それも含めて離島の生活環境から医療環境まで多くのことを実感することができました。

当初は、1日目にチェアの設置等の準備、2・3日目に終日診療、その後片付け、4日目に帰鹿という予定でした。しかし、台風が近づいてきている情報が事前に入ってきていたので、15時頃口永良部島に到着し、その直後から急ピッチで準備を始め、初日から診療を行いました。そして、2日目は予定通り午前・午後と診療、診療後に片付けを行い、3日目に帰鹿しました。4日間で行う予定の全てのことを3日間に短縮して行ったので、スケジュール的にはやや多忙な3日間でありました。それでも、受診希望者へは全員、診療・治療することができたので良かったと思います。

口永良部島には歯科医院が無いので、県歯科医師会より運転してきた診療バス『こじか号』と、現地にある椅子と持参した道具で急設した2台のチェアで診療を行いました。参加する以前は、専用チェア等の無い環境でどこまでの治療ができるのだろうか、と考えていました。滞在期間が限られているため、インレーや義歯作製など数回の来院を要する治療こそ行えませんが、実際に行われている治療は、普段大学病院で行われているものと同様で、質の高い治療環境の再現に驚きました。鹿児島から持参した器具や道具は、離島診療用に改造されていたものも多く、長年の離島巡回診療の経験とシステムが、現在へと受け継がれていることを感じました。そして、診療を通し、来院できる回数が限られている場合の治療法の選択や応急処置など、普段の病院実習では学ぶことのできないことを学ぶこともできました。

また、現地の方々と触れ合い、話をする中で、半年に一度の巡回診療に対する期待の高さを知りました。身近に歯科医院が無く、気軽に受診のできない環境の話聞くことで、歯科医師の社会的貢献度の高さや重要性を改めて実感しました。それと同時に、半年に一度の巡回診療があるものの、それ以外の手段は1時間半かけて屋久島まで行くしかなく、口永良部島の方々の歯科医療環境の改善されることが望まれます。

最後に、今回、非常に貴重な経験をさせてくださった、鹿児島大学歯学部とスタッフの方々、そして口永良部島の住民の方々に感謝の意を申し上げたいと思います。今回学んだ

ことを生かし、今後一層の研鑽に精進して行く所存であります。



今回の離島実習は台風接近の影響で予定よりも1日早く帰ることとなりました。この点は船でしか行き来ができない離島特有のことであると思います。

到着した初日から診療を開始し、診療車とポータブル診療チェアの2台のユニットに成人系と小児系で口腔外科の先生、小児歯科の先生がそれぞれ担当して診察を行いました。

成人系の場合にはまず問診票に記入をしてもらい、それをもとに口腔内所見、歯式をとり治療をしていました。治療内容としては抜歯、義歯調整、リラインなどを行っていました。

小児系の場合も成人系と同様に問診票に記入をもらい、それをもとに口腔内所見、歯式をとりレントゲン撮影を行い、う蝕の進行度を判定していました。

今回は小児の患者さんが多く、う蝕の進行度も重度なものが多数見受けられたこと、また学校などを考慮し、ブロックに分けて何回か治療を行うこととしていました。ラバーダム防湿を行い、コンポジットレジン充填、抜歯、抜髄、乳歯冠装着、サホライド塗布、シーラント、フッ素塗布などを行っていました。

診療車にはほぼ一般の歯科医院と同等の設備が備わっており大変驚きました。しかし、台風が近づいているなどの天候に完全に左右される船が唯一の移動手段である離島特有の状況のため、予定が大幅に変更してしまい、患者さんを長い時間待たせてしまうということになってしまいました。この辺りの天候の変化等も想定に踏まえ、効率よくできないか検討が必要であると感じました。

また、口永良部の島の方の認識と治療を行う側の認識にズレのようなものを感じました。このため実際にこの島の方々がどのような歯科治療を求めているのか、それに対して治療を行う側はどれだけ応えることができるのかを一度議論する必要があると感じました。

さらに、今回の実習では特に小児のう蝕に重度な進行が多く見られました。このため、保護者や子供たちに食事指導、ブラッシング指導、保護者による仕上げ磨きなど、普段から取り組むことのできるデンタルケアなどの指導をしていく必要もあるのではないかと感じました。また、見学で同行した学生の私たちにもできることを考え、普段授業や実習を通して得た知識などを最大限に生かして、講話会などできることがないだろうかとも感じました。

今回初めて離島実習という形で離島診療に帯同させていただき、実際に自分の足で何時間も船に揺られながら向かい、自分の目で現場を見させていただき多くのことに気付かされました。このような経験は普段の座学では決して学ぶことや理解することはでき

ません。このことは離島自習を行っている鹿児島大学の大きな特色であるとも感じました。この貴重な経験を大きな糧として、歯科医を目指して日々邁進していきたいと思えます。



## 黒島への離島巡回診療同行実習

伊東 聖吾

今回、離島巡回診療同行実習として、三島村の黒島に同行させて頂いた。自分は数年前に三島村の硫黄島に行ったことがあり、離島の環境がどのようなものかは知っていたが、そこで歯科医療をどのように行うのかは分かっておらず、この実習には非常に興味があった。

黒島へは 6 時間弱の船旅で、船は途中、竹島と硫黄島を経由した。黒島では平地があまりなく、ほとんどの道がかなり急な坂道になっている。ここでは高齢者も多く見られ、坂道の多いこの環境では生活が大変そうに思われた。

診療を行う大里ふるさとセンターに到着して直ぐにセッティングを開始した。センター内の診療所にある歯科チェアの周りにこじか号からおろしたポータブルのバキューム等を展開したが、バキュームのポンプが故障して動かないというアクシデントに遭遇した。代替として、後始末用に持参した掃除機をバキュームのポンプ代わりに使うことにした。掃除機とポータブルを接続するコネクタを用意してあるところから、以前にもポンプが壊れたことがあったのかもしれないと思った。この掃除機は古い機種で、診療中に使った場合は患者と会話が出来ないくらいの騒音が出ていた。セッティング終了後、2 階にて同時進行で行っていた講話会に参加した。講話会では予防、歯周病の話が中心であり、この話と同時に島の子供達の歯科診療と歯磨き指導、フッ素塗布を行った。子供達のうち数人に齲蝕の見られる子がいたものの、離島巡回診療で定期的に検診を行っているためか、極端に進行している子はいなかった。

翌日は朝 8 時半から診療を開始、全部で 10 名程度の患者を診た。診療開始前には同行した県歯科医師会の事務の方により既にバキュームのポンプが修理完了しており、無事に診療を行うことが出来た。こじか号の車内は診療するにはとても狭く、スタッフは 4 人(Dr、DH×2、研修医)でいっぱいとなり、自分はあまり入ることが出来なかった。この狭いスペースにもかかわらず、こじか号ではデンタル撮影や滅菌まで出来るのには驚いた。デンタル撮影中は防護カーテンをそのたび展開していたのが印象的だった。

衛生士や先生もこの島に何回か来ているので、地元の人と顔見知りであった。診療所に菓子を貰いに来た地元の人と話をしつつ、「お口の検査をしませんか」と声をかけたりしていた。そのおかげで予約よりも多く診療を行うことが出来、診療終了予定時間を延長した。これが離島診療をうまく回すコツではないだろうかと感じた。地元の人と継続して仲良くしていかなないとこのようなことは出来ないであろう。結局 1 時間遅れて撤去作業を開始、終了後に次の目的地である片泊に移動した。移動するために使用する車が荷物のためスペースが無く、研修医と我々学生の 3 人はこじか号に乗せてもらった。こじか号に乗る機会は他に無いので、これはとてもいい機会であった。

次に診療を行う片泊ふれあいセンターではデンタルチェアの椅子部分のみのものが置いてあり、これを畳部屋に運んで使用した。このチェアの周辺にポータブルの機器を並べた。

ここでは10人弱の患者が来院したが、そのうち半分は義歯調整であった。調整後、不満が解消されたときの患者の笑顔がとても印象的だった。診療時間終了後、講話会と歯磨き指導を行った。レッドコートが上顎前歯の全面に残っていた子がおり、歯磨きの仕方を教えたが次の歯磨き指導の時まで覚えてくれるかどうか気がかりであった。他に歯ブラシの毛が広がりすぎてタワシ



のようになっている子もいた。離島では簡単に歯ブラシを入手出来ないので、離島巡回診療で歯ブラシや糸ようじなどを販売したのはとても良い機会であると思った。

最終日は台風の接近により、1時間早く片泊港から出港した。離島は移動や食糧事情も含めて、様々なことが自然に強く影響を受けることを感じた。帰路途中の竹島で診療スタッフとこじか号は下船し、我々学生と別れた。

今回はこのような機会を設けて頂いて、非常に感謝している。僻地での診療は、地元の方々とのコミュニケーションと、限られたリソースをいかに有効に使うかがとても大事であることが良く理解できた実習であった。開業医であれば特に地元で根付いた診療を長く続けて行っていくことが大事だと思われるので、今回のこの経験を生かしていきたいと思った。

## 離島巡回診療を体験して（諏訪之瀬島）

大庵 佑介

今回、2泊3日で諏訪之瀬島での離島診療に同行させていただきました。諏訪之瀬島は鹿児島島からフェリーで10時間かかるので、1泊目は船中泊でした。

翌朝、9時50分に諏訪之瀬島に着くと民宿の方が港まで迎えに来てくださっていました。民宿に荷物を置いた後は、午後からの診療のために準備に取り掛かりました。診療は歯科巡回診療車「こじか号」と公民館で行いました。こじか号には診療用チェアが1台あり、病院内と同様に診療ができる環境になっており、また、X線撮影や器具の滅菌もできる設備が備わっていました。公民館ではポータブルの機材と手動のチェアを準備しました。診療内容は、学校の歯科検診や齲蝕治療、義歯調整、抜歯など様々でしたが、診療内容によってこじか号と公民館を使い分け、また、歯科医師会のスタッフのアシストもあり、診療はスムーズに進んでいました。離島では年間2回しか歯科治療を受けることができないということもあり、治療の内容は制限されてしまうのですが、時間の許す限り治療してあげたいという先生方の熱意もすごく感じられました。



診療が終わった後は、民宿の方や島の方々とはバーベキューで地元の食材を頂きました。諏訪之瀬島は山の幸では筍、海の幸ではトビウオやカツオやイカや貝など新鮮で美味しい食材がたくさんありました。とくに筍は絶品でした。

3日目は朝8時30分から、前日に抜歯をした方の消毒や義歯調整のつづきを行い、その後は公民館の片付けと掃除をし、10時30分に帰りのフェリーに乗りました。



私自身は鹿児島出身ですが、鹿児島本土から南に行ったことがなく、離島はすごく遠い存在でしたが、今回、離島巡回診療実習を通して2泊3日という短い期間でしたが、諏訪之瀬島の方々とふれあう事ができ、離島がとても身近なところを感じました。また、何もできない学生の私にも「ありがとうございました」とみなさんから言葉をいただき、次は歯科医師として離島巡回診療に参加して、諏訪之瀬島だけでなく他の島にも行きたいと思いました。最後になりますが、今回このような貴重な体験をさせていただき、お世話になった歯科医師会の方々、大学病院の先生方、諏訪之瀬島の方々に感謝します。ありがとうございました。

## 離島巡回診療実習について（三島村―黒島）

渡辺 航太

窓から朝日がそそぐなか、不安と期待でなかなか眠りにつくことができなかつた私だったが、不思議とスッと目が覚めた。申し分のない天気。出発の日、黒島とはいったいどんな所なんだろうか、多くの患者さんが来てくださるのだろうか、などの多くの思いを胸にフェリーに乗り込んだ。ガチガチに緊張していた私を、錦江湾を優雅に泳ぐイルカが出迎えた。

9月6日から9日までの4日間、鹿児島島の離島である黒島に離島巡回診療の臨床実習の一環として同行した。種子島や屋久島などの大きな島でさえ行ったことになかつた私にとって離島に行くことには大きな不安があつた。しかし、鹿児島島の離島での歯科治療の実態はどうなっているのだろうか、歯科医師のいない地域ではみなどのような口のケアをしているのだろうかなどに興味を持ち鹿児島大学特有のこの実習に参加した。

フェリーは6時間ほどで島に着いた。美しい自然に囲まれ、自然と人がみごとに共存している生命力にあふれる島であつた。島での生活はほとんど不自由なく、島の人々はとても優しくしてくださつた。

2日目からは診療も始まり、自分の離島に対する認識と、実際の離島における歯科の実態は大きくかけ離れていた。私は、離島ではなかなか歯科診療ができず、多くの人は何らかの問題を抱えていると思つていた。しかし実際には島の人々は本当に口のケアに対して熱心で、多くの人がかつた口腔内に問題を抱えていないことが分かつた。また、積極的に本土に渡つて治療を行つたり、予防に対して十分な知識を持つていた。今回の診療でも、重症の患者さんはほとんど来ず、多くが検診や義歯の違和感などの軽い症状のものであつた。それほど島の人々は歯科に対して十分な認識を持つていた。

診療について私が驚いたのは、巡回診療チームの手際の良さとチームワークであつた。診療器具は組み立て式で水が出なかつたり、うがいの場所が無いなど不自由も多少あつたが、そんな診療場でもしっかり患者さんの要求に答え、各人が自分の役目をしっかり持ち手際よくすることで、治療においては大学と何ら変わらない医療を提供できていた。患者さんも満足そうであり、私にとつても有意義な時間を過ごせた。



（・・歯周検査中・・）

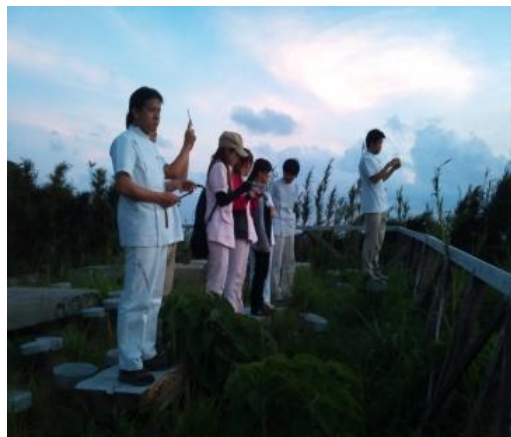
3泊4日の実習では、同行した先生方や衛生士さんから多くの情報を聞くことができ、特に民宿では食事時や夜の親睦会の時にとつても多くの情報を知ることができた。このよう

に先生方と宿で共にすることで歯科医師として今後どのように過ごしていけばよいかなど、大学だけでは決して経験することのできない深い話をする事ができたのも今回貴重な体験となった。

最後に、親身になってご指導して下さった先生方、円滑な治療のためには不可欠であった衛生士さん、様々な段取りと島の多くのことを教えて下さった歯科医師会の方々、本当にありがとうございました。今回の貴重な体験は私を大きく成長させてくれたと思います。このような体験ができ、心から感謝しています。



(診療巡回チーム集合写真)



(実は観光もする！)



## 離島実習を終えて

大村 崇維

今回離島実習で口永良部島に行ってきました。屋久島まで四時間かけて行き、そこで船を乗り継ぎ、乗さらに一時間半かけて辿り着きました。

口永良部島に着いた時には船酔いでふらふらでしたが診療所まで歩き診療台を設置し、近くの公民館で講話の準備をしました。準備が終わった所で民宿に行き夕食を頂き、講話のため公民館に戻りました。講話には、10人ほどの方が参加していて、熱心に話を聞いていました。最後に参加されていた島民の方と少しだけ話をしたのですが、色々と歯のことについて聞かれて、やはり島に歯科医院が無いと情報が入ってこなくて大変だろうと感じました。講話の後にはいきなり、島民の方に誘われて宴会に連れて行かれ、島ならではのもてなしを受けました。

翌日から診療所で診療が始まったのですが、やはり普段学校で行っている診療とは違うことが多く、驚きました。その日の内に治療を終わらせなければならない点、限られた器具だけを用いて処置をしなければならない点、アシストをするにしても普段と違う場所に器具があったり、急にタービンの水が止まったりといろいろ大変でしたが、学校で行う実習よりも近くで患者さんに接することができ、実際に口の中を診る機会が多く色々させてもらえて楽しかったです。

初日に診た患者さんが翌日診療所を訪れた時に、「昨日は良い歯をいれてもらってよかったです。ありがとうございました」と感謝の言葉を受けた時は離島実習に参加して良かったと思いました。診療を終えた後は、島の温泉、民宿での美味しいお酒と食事に癒やされました。

三泊四日の日程で、診療をしたのは二日間だけでしたが、やはり島の人にとっては離島診療は本当に必要とされていると感じました。今回その診療に参加することができて本当に良かったです。今後、今回の経験を大学病院での実習に活かしていきたいと思います。



## 離島巡回診療同行実習を終えて（中之島）

池田幹人

青々とした広葉樹林に覆われた島。これがフェリーから見た中之島の第一印象でした。それは、想像していた熱帯樹林が鬱蒼と生い茂る南の島とは全く違ったものでした。島に着きました。診療が始まるまで少し時間があつたので、旅館の近くを散歩してみることにしました。すると、ちらほらとガジュマルやバナナの木が目に入ります。建物は台風から守るためみんな低くなっています。そこは紛れも無く南の島でした。

今回の診療団は、平成23年11月25～27日の3日間の日程で、大学病院の先生3人と県歯科医師会の衛生士2人、職員2人、学生が自分を含めて2人という構成でした。

診療に先立って準備が始まりました。本来はこじか号と移動式ユニットの二台で診療するのですが、いつも移動式ユニットを設置するコミュニティーセンターがイベントのため今回は使用できませんでした。急遽ユニットが一台で診療することとなりました。

診療が始まりました。島内放送を聞きつけて、患者さんが一人、また一人とやってきます。さっそく問診をとりました。主訴や注意すべき項目を先生とあらかじめ打ち合わせ、患者を導入します。そこまでは大学病院と一緒です。しかし、ここから先は違いました。治療のボリュームが大きいのです。何箇所もいっぺんに治療します。通常なら何回かに分ける治療もまとめて行います。なぜならば、次の治療は何ヶ月後の離島巡回診療になってしまうからです。今日で治療を完結させてしまおうとバリバリ治療を進める先生方の姿を目の当たりにして、大学病院とはまた違ったエネルギーを感じました。自分もCR修復や乳歯冠装着などの齶蝕治療のアシストや、義歯調整や修理を行うなど大忙しでした。

診療を終え、今回の宿舎である大喜旅館で夕食をとりました。大喜旅館の食事は美味しくボリュームもたっぷりでした。一段落した所で、みんなで温泉に入りに行きました。中之島の温泉は硫黄泉で匂いがかなり強いですが、それがまたなんとも言えず心地良かったです。乳白色の温泉にしばらく浸かっていると、一日の疲れがスーッと引いていく気がしました。

離島巡回診療同行実習は二泊三日と非常に短いものでした。しかし、島の人々にとって、離島巡回診療が重要なものであることが実感できたと思います。先生がふと言った一言が心に残ります。「島の人たちは我慢強いよね。」例えば、島の人たちは義歯の調子が悪くなくても、すぐに調整してもらえませんが、最寄りの歯医者には、片道六時間掛けて本土に行くか、奄美大島に行かないといけません。なので、少々合わない義歯でも我慢して使用しているのが現実です。こうした現状を少しでも改善するために離島巡回診療はあるのです。

帰りのフェリーが出航するとき、多くの島の人達が見送りに来てくれました。治療した島の人たちに、「ありがとう。」と言ってもらい、なんとも言えない充実感を味わいました。

この場所は、日常でついつい忘れてしまいがちなことをあらためて気づかせてくれます。  
次は歯科医師としてここに帰って来ようと心に誓いました。



出発前の集合写真。みんな見送りありがとう！



最後にこじか号の前で記念撮影。



アシスト中です。

## 離島巡回歯科診療同行実習を終えて（中之島）

孫田哲郎

平成23年11月25～27日の3日間の日程で大学病院の先生3人、歯科衛生士さん2人、職員2人、学生2人というメンバーで中之島に行きました。

フェリーに乗ること8時間、中之島に26日午前7時に到着しました。11月も終わりに近いのに島の風はまだ秋風のような感じでした。到着してすぐに、宿泊する大喜旅館まで「こじか号」（鹿児島県歯科医師会の小型歯科診療用バス）に乗って行きました。こじか号の車中を見渡すと、これからここで行われる診療を想像して緊張と期待が膨らみました。大喜旅館に着き、朝食を食べ、荷降ろしや着替えを済ませていると島内放送で診療時間と場所が流れました。

午前9時ごろ、診療所となるコミュニティーセンターに着くと、早速チーム全員で準備を行いました。コミュニティーセンターの周りにはちらほら子供たちが見え、遊びに来たのかなと思って見ていると、全員患者さんでした。診療開始時間と同時に患者さんが来て驚きました。次々と患者さんが訪れ、診療時間内では間に合わないほどでした。通常は数回に分けて行うような治療を、時間の関係上1回で行わなければならないのは患者さんも大変だと思うのですが、島の人々はとても我慢強く、また先生方もなるべくスピーディーにかつ確実な治療を行っていくのには感動するばかりでした。先生の監督のもとで義歯修理を行っている時、島の子供が話しかけてきました。こういった人とのオープンな触れ合いも離島実習ならではの、すごく新鮮な体験でした。義歯の修理を自らの手でやったことに充実感を感じました。そして、人の助けとなれる歯科医師という職業の魅力を再認識することが出来ました。

診療では、僕は問診の手伝いや義歯の修理、CR充填のアシスト、患者さんの導入などを行い、息つく暇もありませんでした。先生方は診療時間を超過しても、一切の妥協を許さない姿勢で診療に取り組んでおられるのがヒシヒシと伝わってきて、歯科医師のあるべき姿を見たように思います。そんな熱意あふれる診療に微力ながら参加できた自分は幸せだと思います。

初日は本当に大忙しで、フラフラになって大喜旅館に戻りました。夕食を終え、先生方とともに近くの温泉に出かけました。そこは硫黄泉で、疲れた体をお湯に浸すと格別に気持ち良かったです。普段は話すような機会があまりない先生方から、大学内のことや、将来の進路のこと、先生方の知らなかった一面などいろんな話を聞かせていただき、これもまた貴重な経験でした。

最終日の診療は午前中だけでしたが、無事にすべての治療が終わり、先生方の治療計画は素晴らしいと思いました。移動式ユニットやこじか号の片づけを行っている時、本当に充実した2日間が思い起こされました。片づけを終えフェリー乗り場まで行くと島民の方が見送りに来てくださっていて、とても感激しました。

今回の離島巡回歯科診療への同行は、歯科医師の必要性や歯科医師となるための心構えなど、短い期間ではありましたが、そういったものをリアルに肌で感じる事ができたことが僕のこの離島実習での収穫でした。この経験を生涯大事にして、歯科医師として邁進して行きたいと思えます。



問診や診療の補助を行った診療中の風景



遅くまでの診療、お疲れ様でした



診療後はこの温泉で癒されました！

## 離島巡回歯科診療同行実習を終えて（悪石島）

中山麻衣

私は、11月11日～13日（2泊3日）、離島巡回診療同行実習にて、悪石島へ行ってきました。悪石島は鹿児島市から292.5km南下した位置にあり、人口61名、世帯数33戸（平成23年4月）の島です。鹿児島市を深夜に出発して、約11時間の船旅でした。

行きフェリーの中で、諏訪之瀬島の島民の方とお話する機会がありました。その方は、本土に歯科治療に行くのは、時間や労力、滞在費などの負担が大きく、すごく大変なことであると仰っていました。また、高齢であったり、様々な障害があったりして、治療に行きたくても行けない人がいる、ということも教えていただきました。悪石島に到着する前に、少し離島の現状を知ることができました。

島に到着すると、想像以上に何も無いことに驚きましたが、自然豊かな美しい島であると感じました。到着後は、すぐに診療の準備が始まりました。診療は、歯科巡回診療車のこじか号と、ポータブルユニットをコミュニティセンター内に設置して行いました。準備は診療スタッフによって手際よく行われ、約1時間ほどで、歯科診療所が完成しました。

私は、2～5時の午後の診療に参加し、おもに小児の診療の見学をしました。歯科医院のないこの島の子供たちの口腔衛生状態が良好に保たれているか心配でしたが、診療に来た島の子供たちにはほとんど齲蝕は無く、その代わりにシーラントなどの予防処置がされていることが多く驚きました。保護者の方々も、子供たちの口腔内の状態を非常に気にしており、予防に対する意識がすごく高いことがわかりました。これには、歯科医院に行きたくても簡単には行けないというこの島の現状が関係していると思いました。そして同時に、この島における巡回診療の役割が非常に大きいことを感じました。

私は、口腔内診査、ブラッシング、PMTTC、フッ素塗布などをさせていただきました。島の子供たちはみんな元気で、大変なこともありましたが、診療が終わり、ありがとうございました、とお辞儀をされた時は、本当に嬉しかったです。

こじか号での成人系の診療は、時間の関係であまり見学することができなかったのですが、2年越しで治療をされている方もいるということを知り、驚きました。たとえ一回の巡回診療で治療を終わらせることができなくても、できる限りの治療をして、次に来る先生に続きを託す。そうすることで、時間はかかっても患者によりよい歯科医療を提供することができるかと学びました。また、島でできる限りの治療をしておけば、本土で続きを行う際に、治療期間を短くすることができ、負担を減らすことができる。そういう意味でも巡回診療が役立っていることがわかりました。

今回の日程では、島の滞在時間が約23時間という短い時間でしたが、本当に貴重な体験をすることができました。離島実習に参加することができて本当に良かったです。このような機会を与えて下さった歯科医師会の方々、ご指導頂いた先生方、そして悪石島の方々に心から感謝します。本当にありがとうございました。



11/11(金)23:50 鹿児島本港出発



フェリーから見た悪石島



仮面神ボゼがお出迎え



こじか号とコミュニティセンター



PMTCをしているところ



島には猫がたくさんいました



## 悪石島での離島巡回歯科診療同行実習を終えて

北村優奈

私は、11月の悪石島での離島巡回診療に同行させていただきました。悪石島までの11時間という長い船旅の中で、離島での診療は本土とどう違うかなどのお話を、先生方からたっぷりお聞きして、わくわくしながら上陸しました。

診療は小児と成人に分かれて行い、診療車と、コミュニティセンター内に即席の診療台を設置しました。タービン・コントラ・スリーウェイシリンジからライトまで、普段の大学病院では当たり前のように使っているものの全てを、悪戦苦闘しながら配線を整えます。

離島では、設備や材料のそろった本土と違って、いつでも何でもできるわけではなく、その限られた環境の中で患者さんにとって最も良い方法を考えなければいけません。先生方は、年に2回しかない診療をととても大切にしており、患者さんへの対応はとても丁寧でした。

もし何かあったとき、本土の方ならすぐに大学病院に来てもらって対応できることでも、島民の方は簡単に本土に上がってくることはできません。長旅の上、船の便数も少ないし、天候にも左右されます。それに島で働いている方は、治療のために長期間仕事を休むわけにもいきません。歯科医師は、それらのたくさんの離島ならではの条件を考慮して、患者さん自身に寄り添って治療を行わなければ、患者さんの満足を得られないのです。離島という、我々の日常から遠く離れた場所での歯科医療こそが、我々が目指すべきとされているPOS(Patient Oriented System)、つまり“患者中心”の医療なのではないかと思いました。

多くの場合、歯科治療は一度きりでは終わらないものです。そんな中で、一回の診療でできる最大限のことをして、次の巡回診療にどうつなげようかと考える先生方はとても真剣で、見学している私たちにも離島診療の難しさと面白さが伝わってきました。

診療後は、数ある離島のなかでも悪石島ならではの温泉につかり、疲れを癒したり、民宿では先生方や歯科医師会の皆さんとの懇親会も行ったりと、とても楽しい時間を過ごすことができました。お世話になった島民の方々、先生方、歯科医師会の皆さんに改めてお礼を申し上げたいと思います。

